

地方都市における市街地の計画思想に関する基礎的研究 - 桐生と八王子を対象として -

足利工業大学大学院 学生会員 稲村晋佑
足利工業大学 正会員 中川三朗

1. はじめに

近年、歴史性・文化性豊かな市街地にかつての賑わいを取り戻そうとする試みが全国各地で展開されている。また、改正文化財保護法や景観法の施行によって伝統的建造物群保存地区制度や文化的景観などにおいて、町並みが文化財として評価され保存や活用されるなど、かつての雰囲気や伝わるような空間を活かしたまちづくりが各地で進められている。しかし、地域においてまちの基礎でもある町割の重要性の認識不足となっている。そこで本研究では、「誰が何のためになぜ」という視点に着目して絵図と現状のまちから多面的に分析し、計画思想を明らかにすることを目的とする。

2. 対象地区の概要

(1) 対象地区の選定

本研究では、当初の桐生新町である現在の群馬県桐生市本町一丁目・二丁目周辺地区と、当初の八王子横山十五宿である東京都八王子市の横山町を中心とした中心市街地地区を対象とする。また以下の理由により、対象地域を群馬県桐生市と東京都八王子市に選定する。

歴史的に見て、同じ年代に同じ人物によって計画された町割である。

まちに栄えた産業が織物である。

現在も歴史・文化を活かしたまちづくりを展開している。

(2) 対象地区に関連する人物

a) 大久保長安

天文 14 年 (1545 年) に甲斐武田氏の猿楽衆大蔵太夫の子として生まれ、蔵前衆を勤めた。武田氏が滅びた後、徳川氏の家臣に取り立てられ、関東入国後は代官頭となり、榊原康政のもとで家臣団の知行割・領国内の検地にあたった。慶長 8 年 (1603 年) に、幕府奉行衆 (老中職) の一人に加えられ、家康の駿府政治の一翼を担った。長安の功績は、八王子・青梅・桐生の町創設や、石見・佐渡・伊豆の鉱山開発、東海道・中山道・甲州街道の宿駅整備、江戸・駿府・名古屋の築城など、信玄堤などである。特に治水・鉱山・築城の技術に手腕を発揮し、幕府財政の礎を築いた。

b) 大野八右衛門

武蔵多摩郡横山村で生まれた。天正 18 年 (1590 年) に徳川氏の代官頭大久保長安の手代として、桐生領の地へ派遣された。天正 19 年 (1591 年) に新町の町立てとして慶長 3 年 (1598 年) に桐生領の検地に携わる。

c) 長田作左衛門

家康が天下を取り慶長 6 年 (1601) 江戸に幕府を開くと街道の整備が行われる。その時、甲斐方面への交通路として、小仏峠越えの道を整備し関所を設けるなど、やがて五街道の一つともなる甲州街道を開通させるのだが、この街道整備の任に命ぜられたのも大久保長安だった。北条氏支配時代の八王子城下から原野の窪みの土地に現在の八王子の町を造りあげた。この時、長安の下で八王子の町の建設に力を注いだ人物に長田作左衛門である。作左衛門はもと八王子城主北条氏照の家臣で、のち武士を捨て総名主となって現在の八王子の基礎を築いた。

3. 町割の成立

a) 桐生新町

天正 18 年（1590 年）に桐生領は徳川氏の蔵入れ地（天領）となった。これまで黒川山中を含む桐生領五十四か村域は、柄杓山城を本拠とした由良成繁氏の支配下にあった。由良成繁氏は、後北条氏に味方したため常陸牛久へ国替えとなり、徳川氏の代官頭大久保長安の支配地へと替わる。同じ年に、長安の命を受けて桐生領を支配するために派遣された手代大野八右衛門は、由良氏の支配していた頃の城下町（久保村町屋）が桐生領の触元として規模が小さく手狭であるため、荒戸原に新町を作って町屋を移すことを考えた。この際に計画され実行されたまちである。

b) 八王子横山十五宿

関東入国の天正 18 年（1590 年）北条氏の時代に支配されていた八王子城や八王子城下のまちから新たに甲州街道を設け、そこに町を計画して移住させた。既存の城と町には、千人同心の全身である武士を配備させ警備にあたらせた。洪水からまちを守るために浅川に石見土手と言われる堤を築いた。町には代官の陣屋を置いて、年貢の取り立てや警察の仕事など地方の行政を行った。当時は道を折れ曲がらしたりして、敵がまっすぐ進めないようにしたり、大きなお寺を周囲に移し配置することで防衛のまちづくりをした。

4. 計画思想の視点

計画思想を読み取る上で視点の検討を行なった。

まず町割の構成要素を抽出後にそれを 3 つの視点に分類したのが右の図 4 - 1 である。これは後に空間構造分析においても使用する視点として位置づけている。

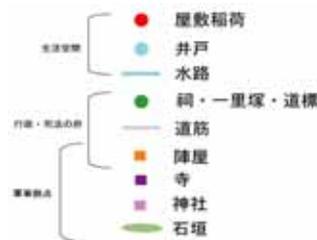


図 4 - 1 空間構造分析の凡例

5. 空間構造分析

ここでは GIS（地図太郎）を使用して、空間構造分析を行なった。先に位置づけた計画思想を読み取る視点と分類をもとに、対象地区の現状のまちと絵図を重ね合わせ分析を行なった。その結果、桐生においては計画当初の町割を保持しており、八王子は戦災にあったものの計画当初の敷地割や寺などの配置は変わらない町割であることが明らかになった。



図 5 - 1 桐生新町の空間構造分析結果



図 5 - 2 八王子横山十五宿の空間構造分析結果

6. まとめ

本研究の成果は、町の成立や社会情勢を町割から分析した「まちづくりと計画の概念」で代表される、計画思想を明確にしたことである。また計画思想を導くにあたり使用した段階的な要素の抽出は、従来の町割を解明する人物に着目しただけのものではなく、時代背景や社会情勢、また都市計画分野における技術つまり手法を総合的に導き、計画思想を明確にできたことは重要な視点であることが明確になった。そして何より、意図的に計画されたまちであったとしても、ある時期から権力が時代の変遷と共に手を引いて町が衰退しても、その後もまちが生き続けてきたということが重要であり、これからのまちづくりに求められる地域が忘れかけている意識ではないかと考える。